

被災史料保全活動関連の 科学研究スタート

神戸大学文学部の鈴木正幸氏を研究代表者とする科学研究「被災史料保全活動からみた都市社会の歴史意識に関する研究」（基礎研究B）が審査を通過しました。助成額は880万円です。被災史料の保全活動に携わってきた研究者、および都市形成史を研究対象にしている研究者が、1997年度から3か年計画で共同研究を行い、報告書としてまとめることになりました。テーマはおおむね以下の通りです。

- ① 震災後の史料保全活動の分析を通じて、現代社会における史料保全のあり方を考える。
- ② 都市部を中心に起こった今回の震災そのものを、歴史事象としていかに記録するかという方法論に関する研究。
- ③ 被災地の具体的な歴史と、そこにおける市民の歴史意識との関係についての研究。

そのための基礎作業として、まず史料保全活動の実際を把握するため、基礎的なデータの収集整理を行います。また保全された史料の多角的な分析を行うため、史料の仮整理も予定しています。

史料ネットとしては保全活動に関連する諸資料を提供するだけでなく、研究活動の面でも積極的に協力することになりました。科研グループからの要請もあり、史料ネット運営委員会のメンバーによる報告も行われています。

研究代表者以外の研究分担者は以下のとおりです。高橋昌明（神戸大学文学部）・持田ひろみ（神戸大学国際文化学部）・奥村弘（神戸大学文学部）・坂江渉（神戸大学文学部）・西谷地晴美（奈良女子大学文学部）・芝村篤樹（桃山学院大学経済学部）・今井修平（神戸女子大学文学部）・小田康徳（大阪電気通信大学工学部）・塚田孝（大阪市立大学文学部）・小路田泰直（奈良女子大学文学部）・馬場義弘（滋賀大学教育学部）・今津勝紀（樟蔭女子短期大学）・中川すがね（甲子園大学人間文化学部）。

なお、第1回の研究組織会議は6月1日（日）に神戸大学文学部で、第2回は7月5日（土）に六甲道の勤労市民センターで開かれました。

（文責・馬場義弘）

神戸市域の史料の仮整理すすむ

自治体の史料整理および保存公開機能が十分でなく、しかも被災地で最大の都市である神戸市域の被災史料の多くは、現在神戸大学文学部に仮保管されています。史料ネットは、このような状況のなかで、保全史料群の保存と概要調査のため、ボランティアとして史料の仮整理を行っています。

これまで、東灘区の昭和期の区画整理事業の実施過程が詳細にわかる藤本博氏所蔵文書について、その仮整理が二週間に一度、4～5人のボランティアによって進められています。

さらに、さる7月15日、もっとも状態の悪い東灘区御影の山本豊氏所蔵文書の仮整理をはじめました。この文書は、山本家の解体の際、二重壁の間から出てきたものです。山本氏がこの家を所有する以前の所有者である中松徳衛門商会の文書で、湿気と鼠害・虫害にさらされており、保管状態はきわめて悪いものでした。

この日の仮整理は、ネットのボランティア6

名で文書総量の半分を虫干し、分離可能なものを一点ごとに整理するという作業を行いました。このような過程から、この文書群が酒造と関連して重要な意味をもった酒樽製造業者の明治から昭和にかけてのまとまった史料群であることがおぼろげに見えてきました。この文書については、夏休みを利用して今後も仮整理を継続的に行う予定です。

また8月3日から5日、神戸大学日本史教室の古文書合宿の際、長浜万蔵氏所有文書の仮整理を行いました。この文書は、史料ネットの東灘での活動のなかでその存在をつかむことができたもので、今年の春に保全したものです。

今回の仮整理では、この史料の近世分、段ボール箱で5箱ある全体のほぼ3分の1の調査を終えました。その中で文書の内容が、脇浜村（現灘区）の近世の村文書と近代の都市部の財産区や魚市場経営・政治関係からなることがわかってきました。